

SJ Interview

SJ インタビュー

小・中・高校生に対して効果的な交通安全教育を普及させるために何が必要か

東北工業大学 総合教育センター 教授 **小川和久** さん



小川さんは(公財)国際交通安全学会のプロジェクトの一つ、「児童生徒等に対する効果的な交通安全教育を普及させるために何が必要か～教育普及スキームの構築研究」のプロジェクトリーダーを務め、4月9日にオンライン開催された同学会の2020年度研究調査報告会※で3年にわたる研究成果を発表しました。

「これまでの研究で、交通安全マップづくりなど子どもたちが『主体的に考える』要素を取り入れた交通安全教育は印象に残りやすく、意識や行動の変容を導きやすいといった効果を確認しています。しかし、このような教育はなかなか普及していかないのが現状です。そこで、普及促進のためのスキーム(枠組み)を構築することを、今回のプロジェクトでめざすことにしました」と小川さんは振り返ります。

教育普及スキームを構成する要素として設定したのは以下の4つ。

- ①魅力ある教育プログラムの開発(児童生徒の主体性を重視)
 - ②エビデンス(効果測定の実証的データ)の蓄積
 - ③教材・評価ツールの開発
 - ④教育支援に関すること(指導者育成など)
- 研究チームは、2018年度から2020年度にかけて、小学校・中学校・高校で、児童生徒の発達段階に応じた教育実践を行い、上記の4つの要素に関して基礎資料を収集し、分析しました。

小学生を対象とした教育実践

プロジェクトでは、2018年度に高知県A小学校で3年生を対象に教育実践を行い、交通安全マップづくりによる教育効果とその持続性について分析しました。まず児童は、校区内の危険箇所を探すためのフィールドワークに参加し、そこで見つけた情報を反映した交通安全マップをつくります。これと連動して、特定の危険箇所(交差点)に関して、全校児童を対象に、安全な横断ができるよう指導が行われました。その方法は、実際に通行する交差点の写真を子ども主観の角度で提示



3年生が作成した交通安全マップ(児童の視点で危険箇所が示されている)

しながら、危険回避の具体的方法(どこで止まって、何をどのように見るか)を指導するというシミュレーション学習です。これによって、児童の横断時の左右確認率が大幅に改善されました。



子ども主観の角度で撮影した交差点の写真

下校前の口頭による指導では安全確認率※1が23.2%～38.5%であったのに対し、シミュレーション学習後の確認率は77.8%となりました。その1ヵ月後の確認率は87.3%、14ヵ月後も91.6%※2と効果が持続されていることがわかりました。「同校が最近『挨拶運動(地域の人に挨拶をする)』を推進していることが、周囲をよく見ることと関係しているかもしれない、校長先生から話を聞きました。効果を持続させるための一つの有効な方法かもしれません」。

A小学校の教育実践の過程では先生方による独創的な取り組みが展開されています。例えば、「止まってね」マーク総選挙。どのようなマークが交差点にあれば、自分が「止まる」という気持ちになるか、そのマークのデザインを子どもたちに考案してもらい、人気投票を行いました。1位に選ばれたのは、足をそろえるイラスト(下記参照)。「実際に選ばれたのは、子どもの興味を引きつけるための動物やキャラクターの絵ではなく、極めて現実的なイラストでした。大人には思いつかない、子どもならではの発想です。幼児期からの学習経験の積み重ねから、『止まる』といえば、足をそろえる行為が連想されるのでしょうか。交通安全の教育内容や教材をつくる際は、子どもの学習経験の延長線上で考えていくことが大切だと感じました。現在、児童が考案したこのイラストは、路面標示ステッカーとなり校区の危険箇所に貼られています」。

※1 安全確認を行った集団数 ÷ 観測した集団数
 ※2 安全確認を行った横断者数 ÷ 観測した横断者数



児童が考案した「止まってね」マーク

中学生を対象とした教育実践

中学生を対象とした教育実践に関しては、「安全な自転車通学」をテーマにした系統的な教育プログラム(右上参照)が、宮城県B中学校においてワークショップ形式で展開されました。その一つ、3年生のワークショップは2年生を指導するというものです。3年生

1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・信号交差点横断時の危険予測 ・自分たちの自転車運転を振り返る(ミラーリング法:他者の自転車運転の姿と比較) ・交差点横断時の意思決定の仕方を振り返る(悪魔VS天使:自己判断と他者比較)
2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・校区内の危険箇所に関する情報共有 ・交通安全マップづくり(危険箇所の特定) ・具体的な危険場面と危険予測 ・個別目標「わたしのビジョンゼロ宣言」
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・校区の危険箇所に関する情報を2年生にプレゼンテーション ・当該箇所の具体的な危険予測と具体的な危険回避方法を実演(寸劇)指導 ・先輩へのキャッチフレーズメッセージ

と2年生の班がペアになって、校区の危険箇所について危険予測と危険回避の仕方を伝えます。「始まる前に、どのように伝えたら相手は興味をもって理解してもらえるか、3年生だけで考える時間を設けました。すると、自然に3年生の生徒たちはクルマ役、自転車役、歩行者役を演じ、身振り手振りを交えながら出会い頭事故防止などをテーマにした寸劇の練習を始めたのです。本番が始まると、各班とも3年生は熱心に指導し、2年生はじっと耳を傾けていました。この一連の流れは私たちが意図したことではありません。生徒の主体性を重んじる手法への可能性を感じました。B中学校では安全確認挙動の評価指標として、自転車通学中の安全確認率を4回にわたって調査(下記グラフ参照)。全校生徒が受講したワークショップ2回目後に交差点横断時の安全確認率が最大となり、安全確認を慎重に2回以上行う生徒の割合も増加しました。2019年度はB中学校の1年生用プログラムを山形県C中学校の全校生徒に対して実施しました。実施前後で意識の変化を調べると、自己モニタリング(例:安全確認を忘れた自分に、ハッと気づくことがある)、知識(例:安全確認をうまく行う方法を知っている)の得点がかもに上昇していました。また、プログラムが信号・無信号交差点での確認と一時停止に焦点を当てていたこともあり、クルマとの衝突事故が前年度に比べ大幅に減少しました。「教育により、安全運転をする上で必要な知識を理解し、自分の運転を意識しながら走行するようになったといえます。しかし、B中学校は4ヵ月後、C中学校は3ヵ月後に安全確認率や意識の低下がみられるので、効果の持続性に関しては課題が残りました」と小川さんは言います。

高校生を対象とした教育実践

高校生における教育実践は、岩手県D高等学校の生徒会が企画・運営し、全校生徒が参加した交通安全シンポジウム開催(2019年度)です。シンポジウムのテーマは、生徒一人ひとりが自転車通学の安全を考えることを目的とし、通学路の危険箇所に関する情報共有と自分たちの自転車運転の姿を振り返るという内容。生徒の危

険な走行を例示し、「小・中学生の安全を確保し、手本を示す」「斜め横断・並走・追い越しの禁止」など問題提起を行うことで「実現可能か」「実現困難な理由は何か」について生徒同士で活発に議論が行われました。高校での教育実践では生徒が主体となり、できるだけ生徒全員が関わることができるよう工夫しました。このシンポジウムをきっかけに学校全体で交通安全に対する機運が高まり、2020年度は生徒会が中心となって新入生を含めた全校生徒向けに啓発動画を制作し、シンポジウムも引き続き開催しました。さらに、生徒主体の活動を他地域へリレー方式で普及させていくための試みとして、D高校と宮城県E高校との情報交流がスタート。「生徒会同士の動画メッセージによるやりとりから始まり、WEB会議による意見交換へと発展しました。「自転車事故が課題のE高校でも、生徒の自由な発想で事故を防ぐ対策を考えてほしいと思いました。D高校の取り組みはE高校にとっても参考になったようで、今、生徒会による活動が始まっています。この生徒主体の交流を岩手県や宮城県から東北地方、そして全国へと拡がることを期待しています」。

活動の継続を支援するための仕組みづくりが普及の課題

「3年間の調査研究を通して、児童生徒の主体的な活動は、意識や行動の変容を導く可能性が高いことが示唆されました。また、子どもたちにある程度任せると、大人が考えるより豊かな発想でアイデアが出てくることもわかりました。しかし、このような活動の実践例は国内にはまだ少ないといえます。学校現場を中心とした社会に広く普及させるためには、さらなる社会実装の仕組みづくりが必要です」。

プロジェクトでは「褒賞助成制度を活用した普及促進」「社会実装を志向した継続的活動を支援する仕組み」という2つの観点でワーキンググループを立ち上げました。前者は児童生徒が主体となった交通安全活動を称賛し、良き教育モデルとして活動の継続を支援するもので、後者は主体的な活動を実施するための教材や指導案の作成支援、学習・指導方法に関わる助言など、学校の安全担当教員に対する支援サービスを提供するものです。「褒賞助成制度によって、先駆的な教育活動の掘り起こしができます。それとともに、何が価値あることなのか、その評価基準を明確化することに意味があると考えています。継続的活動においては、子どもたちが主体的に取り組める魅力あるプログラムづくりだけでなく、学校現場と外部アドバイザー(警察、交通安全協会、自動車教習所、大学等)をワンストップでつなぐ支援も視野に入れています」。

小川さんは国際交通安全学会で新たなプロジェクトを立ち上げ、具体化に向けて動き出しています。

※発表資料は以下の(公財)国際交通安全学会ホームページ参照。
https://www.iatss.or.jp/common/pdf/event/list/2006_happyo.pdf

教育実践による安全確認挙動の変化(宮城県B中学校)

安全確認率 = 安全確認を行った横断者数 ÷ 観測した横断者数

